實盛

昭和改訂版

内十七

特259

713

368

278

始

特259
713

實盛

(梗概)或る高僧加賀國篠原にて法席を設け讀經勤行を怠らざりしが、其の高僧の目にのみ其姿を現はせし老翁一人日毎に參聽するを、異み其名を問ひしに、此處の池水は昔齊藤實盛の首を洗ひし所なり、今も其の執心殘りけるか折々は幻の如く見ゆるよしを言ひ、暗に其實盛の幽靈なる由を語りて失せぬ。乃ち夜もすがら池畔に出でて其の亡き跡を弔ひけるに彼翁は老武者の姿となりて現れ、木曽義仲の前にて首洗はれたる一條より、髮鬚をも墨にて染め故郷への錦の直垂を着て出陣したる由を語り、尚ほ懺悔の爲めとて、篠原の合戰に手塚の太郎と奮戰し終に討たるゝまでの有様を演じ、再び夢幻と其の姿は消え失せぬ。

シテ　老翁
後シテ　齊藤別當實盛
ワキ　僧
ワキヅレ　從僧二人
所　加賀國篠原
季　秋

實盛

サシ上　わき
夫西方ハ十万億土、遠く生るゝ道ながら
つれ二人
爰も已に弥陀の國　わき　貴賤群集の
称名の声　つれ二人　日々夜々の法の場　わき　実も
誠ニ摂取不捨の　つれ二人　誓に誰か　漏るべき
わき つれ 三人
独称佛の御名を尋ねん〳〵　各唱る

法乃場ハ志るも志らぬともひく袖ハ經に
洩べきや知人をも志らぬ人をも渡さばや彼
國へ向く法乃舟浮ぶを安き所とやく
勢至の名をきここう取て此上聖衆來迎
去落日の影あらたうとやたやとも又紫雲
乃たな引いろ〳〵人ミ目中の稱名もさゝや
近づきてひゞりや鐘の音念仏の聲ら此堂
へひゞきて了ふ〻居くるしき老比彼乃
よすまもつらすハ醜穢の場ま餘不あらるも
や醜き引せん 一念稱名乃藥の内まハ擬
取乃光明異る稱號光眼此道旅程も川
てたど濟よしくさ此ミハ急らるとせたせ我を

去事なる法じや南無阿弥陀仏

ワキ いかに翁　シテ 御前に候　ワキ 扨も此程日中の
称名に一日も怠る事なし、さる間志の比
人と見る処に、翁の姿余人の見る事
なし、誰に向かつて何事を申すぞと、皆人ふ
審しあへり、今日は翁比名をなのり候へ

シテ 是は思ひの外なる仰せ哉、本より所は天離る
ひな人なれば、人がましう名もあらばこそ
名乗りもせめ、唯上人の御下向、偏に弥
陀の来迎なれば、かかる長生して、此
称名にあふ事、盲亀の浮木、優
曇華の花待得たる心地して、老の幸

身に去ん執心乃波に浮る　悲しきハ此身
なからん安楽國に生るゝと無比の歓喜
をなし此翁が輪廻妄執の閻浮に此名を又
改めて名宣ん事口惜しうこそ候へ
ワキ　実にハ翁の申す理り至極せり去ながら
ひとへに懺悔の御物語なるべし猶々名
を名宣り候へ　シテ　何と名を名乗り申と　ワキ
の事　シテ　さらば御前なる人を退のけ候へ
ワキ　本より翁の姿を余人の見る事はなきまゝ
共不思議なれバ人をのけくべし　さらば名
宣り候へ　シテ　昔長井の斎藤別当実盛は
此篠原の合戦に討れて候ひて今日の名まで

てこそ候ふらめ　わき　其ハ平家の侍かくれなき
弓取いや其軍物語ハ無益只御身の名を
名宣候へ　して　いやされバ其実盛も此前成池
水にて鬢鬚を洗ハれて候ひし其執心残り
なるか今も此辺乃人にハ幻の如くに見へ候ぞ
とよ　わき　そゝと幻に顕るゝとハ扨今も人に
見えし候ふ　して　深山木の其梢とハ見えざりし
桜ハ花に顕れたる老木をそれと御覧ぜ
よ　わき　ふしぎやな実盛の名を申せる物語
人の上ぞと思ひつるに身の上なりけるふし
ぎさてハ扨ハおことハ実盛の其幽霊にて
おハしまし候か　して　我ハ実盛が幽霊なるが魂ハ

冥途にありながら魄ハ此世にとゞまりて
わき上 猶執心の閻浮の世に して 二百余歳の程ハ経
れども わき うかびもやらで篠原の して 池のあ
だ波夜となく わき 昼ともわかで心の闇
の して 夢ともなく わき 現ともなき して 思ひをの
み 上 篠原の草葉の霜の翁さび

人なとがめそ仮初に現れ出る実盛が
名を洩らし給ふなよ亡世語りもはづかし
とて御前を立去て行かと見れバ篠原の
池乃邊にて姿ハ幻と成て失にけり
わき つれ 二人 上 篠原の池の辺の法の水深くぞ頼
む称名の声澄渡る弔ひの初夜より後

後夜ふ至る迄で心も西へ向く月乃光
と共に曇りなき鐘をならして諸ともに
が〻南無阿弥陀仏なむあみだ南無
阿弥陀佛南むあみだ仏　極楽世界
に入ぬれバ永く苦海を越過ぎて輪廻乃
故郷隔りぬ歓喜の心いくばくぞ　所ハ不

退の所命ハ無量寿仏となふあみだ乃
ましや念々相續する人ハ　念ごとに
往生を南無と以ッぱ　則是帰命
阿弥陀といつぱ　其行此義をもつて乃
故ふかならず往生うべしとあり　鳥雉
や鳬しぎやをしどりあひする池の面

みえけれバ老つる翁なるが甲冑を帯し来り
して 埋木の人しれぬ身と沈めども心の池のいひがたき修羅乃苦患の数々をうかへてたまへとよ
わき 老體にまのあたりなる修羅を除人ハ更に見えもせず
して 只上人のミ明らかに
わき 見ゆるや修羅も跡然霜乃
して 鬢髭白き老武者なれど
わき 其出立ハ花やかなる
して 紫ひ錦にくもりなき
わき 月乃光え
して 燈の影くらからぬ夜の錦の直垂に萌黄匂ひの鎧きて金作りの太刀かたな今の身にてハ是とても何の寶乃池の蓮の臺こそ宝なるべけれ宝や

難有法の教も聞もせぬ今生の罪重く
せバおどろかざるべし〳〵　申せ
たゞ執も輪廻乃姿也心を執心をあり捨て
弥陀回懺の臺にならり給ふべし　上　実や
一念弥陀佛即滅無量罪　則廻向発願
頼む心をもて称ふる事なるまじ　上　時至て

今宵逢ひ難き御法を受　懺悔懺悔の
物語称も善悪を書置て身の上ニ倚隔
篠原の草の露と消し　其指
語り申べし　扨も篠原の合戦破
れしかバ源氏の方に手塚の太郎光盛
木曽殿の御前に参り申けるハ光盛

手塚ゝ奇異の曲者とくんで首とつて候へ
大将かと見れバ続く勢もなし又は武
者かと思へバ錦の直垂を着たり名宣
れ〳〵とせむれ共終に名のらず声ハ坂
東声にて候ひしと申せバ木曽殿天晴
長井の斎藤別当実盛にてやあるらん

左ならバ義仲が上野にて見し時鬢
鬚の霞苔なりし今ハ定て白髪た
るべきに鬢鬚の黒きこそ不審なれ
樋口の次郎ハ見知たるらんとて召れしか
バ樋口参り唯一目見て涙をはら〳〵
とながひてあな無慚やな是ハ斎藤別当

にて候ひけるぞ実盛常に申しゝは六十
に餘つて軍せば若殿ばらにあらそひ
さきをかけんもおとなげなし又老武者
とて人ごとにあなづられんも口惜しかるべし
鬢鬚を墨に染め わかやぎ討死せん
由常に申しゝが 誠に染て候ひけるぞ

洗はせて御覧候へと申しもあへず首を持ち
御前を立つて辺りなるこの池波の岸
に臨みて水の緑も影うつる柳の糸の枝
垂れて気霽れては風新柳の髪を梳り
氷消えては波旧苔の鬚を洗ひて見れば
墨は流れ落ちてもとの白髪となりにけり

實名を惜む弓取ハ誰もかくこそあるべし
これやあらやさしやとて皆感涙をぞ流
しける 又實盛が錦の直垂を着る事
私ならぬ望みなり 實盛都を出し時
宗盛公に申様古郷へハ錦をきて帰ると
云る本文あり 實盛生國ハ越前の者にて
候ひしが近年御領に付られて武蔵乃
長井に居住仕り候ひき此度北國に罷
下りて候ハゞ定て討死仕るべし老後の思
ひ出是に過じ御免あれと望しかバ赤
地乃錦の直垂を下し給りぬ しかれバ 上 然れバ
古哥にも楓葉を 分つゝゆけバ錦着て

家に傳ふると人や見侍らんと讀しも此

本文の心なりさればいにしへの朱買臣は錦

の袂を會稽山に翻し今の實盛は名

を北國の巷に揚げ隠れなかりし弓取の

名は末代に有明の月の夜すがら懺悔物

語申さん

ロンギ　上　實や懺悔の物語心の水の底

清く濁りを残し給ふなよ　其執

心の修羅の業廻りして又ここに木曽と

組まんとたくみしを手塚めに隔てられし

無念は今にあり　續く兵誰々ぞと名

のる中にもまづ進む　手塚の太郎光

盛が郎等は主を討たせじと　かけ隔

隔ゞて置く実盛と　押ならべてくむと
ころを　あつはれおのれハ日本一の剛
乃者とぐんでうづよとて　鞍乃前輪ニ
押付て　首かき切て捨てけり　其後手塚
の太郎　実盛が弓手に廻りて　草摺を
たゝみあげて　二刀さす所を　むずとくむで

二疋があひにどうど落けるが　老武
者の悲しさハ　軍にハ為疲れたり　風
にちゞめる枯木の力も落て手塚が下に
なる所を　郎党ハおちあひて　終に首をぞ
かき落されて　篠原の土となつて　影も
形もなき跡の　影も南無阿弥陀仏

弔ひてたび給へ跡とふらひてたび給へ

昭和十年九月廿五日印刷
昭和十年九月三十日發行

定價金五拾錢

著作權所有

著作者　東京市下谷區上根岸町八十二番地　寶生新
發行兼印刷者　東京市京橋區銀座西六丁目三番地　江島伊兵衛
發行所　下掛寶生流謡本刊行會

368
378

終